

公爵家に生まれて初日に

跡継ぎ失格の烙印らくいんを押されましたが

今日も元気に生きてます！ 2

登場人物紹介

クレノ

謎の男子生徒。
平民でありながら生徒会長選挙に
立候補し、パイセンと争うことに。

護衛の子供たち

クリュート

スリゼル

パイセン

水の侯爵家の令嬢。
名門貴族の子が集まる「桜貴会」の
小等部代表を務めている。

アルセル

三番目の王子さま。
少しぼっちゃりしていて、
エトワにも優しく接してくれる。

ミント

ソフィア

リンクス

天輝

金の鳥を象った剣。
エトワの能力の大半が
封じられている。強い男性の声で
鋭いツッコミを入れてくれる、
エトワの頼もしき相棒。

シーシェ

水の公爵家の令嬢。
美貌の持ち主だけれど、
自由気ままでおっとりしている。

ハナコ

魔王の娘。お忍びで町に来たところを
エトワとソフィアに見つかるが、
その目的とは――？

エトワ

風の公爵家の令嬢。
魔力がほぼゼロなので
跡継ぎ失格の烙印を押されてしまった。
転生前はごく普通の日本人で
超マイペースな性格。「糸目」を意味する
エトワと呼ばれている。

目次

第一章	初めての社交界	7
第二章	生徒会選挙	46
第三章	魔族さんとの交流会	99
第四章	影呪 <small>えいじゆ</small> の塔	133
第五章	古都炎上	206
第六章	希望の手綱 <small>たづな</small>	253

第一章 初めての社交界

日本から事故で転生して、風の魔法を使うシルフィール公爵家の長女に生まれた私、エトワ。でも魔力をもっていないせいで、後継者失格になってしまいました！

そんな私のもとにやってきたのが、銀色の髪をもつ天使みたいな良い子のソフィアちゃん、燃えるような赤い髪をした強気な男の子リンクスくん、お人形さんみたいな金髪碧眼へきがんの何を考えているかわからない不思議な子ミントくん、黒い髪がさらさらの何かと腹黒いクリュートくん、背が高く慇懃いんぎんで執事みたいな態度のスリゼルくんの、五人の子供たち。

彼らはシルフィール家の分家である五つの侯爵家の子息で、私の代わりに跡継ぎ候補としてシルフィール家に招かれたんです。

みんな才能のある子ばかりで、誰が跡継ぎになるかわかりません！

そのため試験として私が彼らの仮の主人になって、彼らには護衛役を務めてもらい、一緒に生活することになりました。

みんなで貴族の学校ルーヴ・ロゼに入学したんだけど、そこでもいろんなトラブルが……

名門貴族の子供が集まる桜貴会おうきかいと呼ばれるサロンで、そのの偉いメンバーであるパイシエン先輩

とソフィアちゃんたちが衝突してしまったのだ。

でもなんとか仲直りして、最終的になぜか私もソフィアちゃんたちと一緒に、桜貴会に入ることになったんだけど……

「そういうわけで新たなメンバーも加えて、桜貴会の神聖なるお茶会を開くことにするわ。ええ、神聖な……ね……」

お昼休み、桜貴会の館で、パイシエン先輩がテーブルの真ん中の席に座ってそう言った。

パイシエン先輩は水の魔法を使うニンフイーユ侯爵家のご令嬢。今の桜貴会では、唯一、ソフィアちゃんたちと同格の資格をもつ貴族のお嬢さまだ。

「ふぁーい」

私は持つてきたお弁当をもぐもぐしながら返事をする。

前回のお茶会はパイシエン先輩以外、全員立ってただけど、今回は他のメンバーの子も椅子に座っている。あれはシルウエストレの子たちを迎えるための特別な態勢だったらしい。こっちのほうがいいよね、うん。

ちなみにシルウエストレとは、ソフィアちゃんたちの実家である五つの侯爵家の別称だ。

メンバーの女の子の一人が、青い顔で汗を垂らしながら私を見る。

「お、桜貴会のお茶会の席で、お弁当を食べた人がいるなんて……」

そんなこと言われても、ポムチョム小学校に行く日はお弁当食べていって約束で桜貴会に入りました。現にパイシエン先輩も文句は言わない。

まあちよつとだけ沈痛な面持ちはしてるけど。

あ、ポムチョム小学校っていうのは平民の子たちが通う学校で、私は週の半分ぐらいは午後からそつちで冒険者になるための勉強をしている。

お茶会に出ると移動だけでお昼休みが終わっちゃうから、お弁当を食べるのを特別に許してもらってるのだ。

むしろみんなよく我慢できるねえ。もうお昼なのに。

どうやらお弁当は解散後に食べるらしい。

私みたいに別の学校に行くわけじゃないから、お昼休みの時間はあるだろうけど、でも一番お腹がすいたこの時間に我慢するのは辛いと思う。

そう思ってたなら、ソフィアちゃんが私のほうに寄ってきた。

「エトワさま、その卵焼き美味しそうですね、ご自分で作られたんですか？」

「うん、そうだよ。食べる？」

「はい！ いただきます！」

やっばりお腹すくよね。卵焼きをねだるソフィアちゃんに、フォークに刺して差し出す。

すると、ソフィアちゃんは笑顔で口を開けた。

おお、あーんね。いいいいいよ。

「はい、ソフィアちゃん、あーん」

「あーん」

パイシエン先輩がパンツと机を叩いた。

「エトワ、あーんはしない！」

おっと、あーんはマナー違反でしたか失敬。

私はソフィアちゃんの口にさつと卵焼きを入れると、すぐさま姿勢を正し、お弁当を食べ続ける。そうこうしてうちに、お茶が出てきた。今回は私の分もちゃんとする。

ああ、これは助かる。最初は入るのに戸惑っていたけど、椅子とテーブルのある場所でお茶がもらえてお弁当も食べられるなら、もう極楽だよ、極楽。優雅なお昼タイム。

さすが貴族たちが集まるサロン。お茶も美味しい。

私はずずずとお茶をすすする。

「エトワ、音を立てない！」

パイシエン先輩から二度目のお叱りが飛んだ。

これは失敬。前世の癖で。

今のは前世でもマナー違反なので反省し、音を立てない飲み方に切り替える。場が落ち着いたところで、パイシエン先輩が咳払いをした。

「ルイシエンお兄さまが転校したことによって、私がこの桜貴会の代表を務めることになったわ。ここにいるメンバーは全員、私が桜貴会にふさわしいと認めているメンバーよ」

もぐもぐ。

少し沈黙してから、パイシエン先輩が付け加える。

「本当よ……」

うんうん。

「だから新しく入った子も含め、全員仲良くすることを命じるわ」

「はい」

パイシエン先輩の言葉に、ソフィアちゃんたちも私もそれぞれ返事をした。

以前からメンバーだった子たちも、はい、と頷く。

まだ顔と名前も一致しないけど、仲良くなれるといいなあ。

「それから明日は、アルセルさまとシーシエさまがこちらの館にいらっしゃるわ。みんな失礼のないように心の準備をしておきなさい」

「アルセルさまが!？」

「シーシエさまも!？」

その名前にもとどのメンバーの子たちだけでなく、ソフィアちゃんたちまで驚いた顔をした。それもそのはず。アルセルさまはこの国の第三王子であらせられるお方だ。そしてシーシエさまはこの国にある四つの公爵家のうちのひとつ、ウンディーネ公爵家のお嬢さま。どちらもルーヴ・ロゼの中等部に通われていて、今は二年生と三年生だったと思う。

いきなりの王族と大物貴族の訪問、いったいどんなご用なのだろう。

次の日の放課後、私はボムチョム小学校が終わってから桜貴会の館に来ていた。アルセルさまとシーシエさまがもうすぐ来るからだ。

「ぬっふっふ、王子さまか。かっこいいのかなあ」

ちよっぴり期待してしまう。

だって王子さまだ。前世でもテレビで見たことはあるけど、現実にお目にかかるのは初めてである。

白馬の王子さま。

発想が古いか、夢見すぎとか言われちゃうけど、オールドソックス正統派の良さがわかる女なんです私は。

恋愛イベントに発展したりしないかな!?

平凡な容姿の私が王子さまにでまあい溺愛されちゃって、なーんて、にゅふふ。

転生してここまで恋愛イベントなんて一切なかったから——年齢が年齢だから起きたらそれはそれで問題なんだけ。

現実はそのなうまくいかないとわかってるけど、ちよつとぐらいはこの機会に妄想しときたい。

「そういえばエトワは社交界には参加してなかったのよね。じゃあ、お会いしたこともないわね」
パイシエン先輩がお茶を飲みながら言う。

「先輩は会ったことがあるんですか？」

「ええ」

「かっこいいですか!？」

ぶっちゃけ知りたい! ぶっちゃけそこらへん知りたい!

「エトワはふくよかなお方は好き? 優しそうな感じの」

あー、太ってるのか。

うーん。うーん。

私は想像していた白馬の王子さまを、ぼっちゃり系の穏やかそうな王子さまにチェンジしてみる。

「それはそれでありだと思います! 結婚相手に選びたいタイプ!」

「確かにそんな感じかもね」

正統派の美形も人気あるけど、そういうタイプも意外と需要がある。

一緒にいて癒いされるところがいいんだとか。前世の雑誌のアンケートによるとだけ。

そう答えたら横でガタンツと椅子が倒れる音がした。

何かと思ったら、椅子を倒すほどの勢いで立ち上がったリンクスくんが、こっちをじーっと見ている。
どうしたんだーい。

私に言いたいことがあるのかと思って手をひらひらさせる。すると、ふいっとそっぽを向かれてしまった。

うーん、わからん。

こういうところ、懐いたようで懐いてない野良猫感があるよね、リンクスくん。

「よーしよーしわしゃしゃしゃしゃ」

「うわあつ、なにすんだよ!？」

私は猫っぽいリンクスくんを抱きついて思いっきりその頭を撫でてみた。

ああ、男の子なのにさらさらしている。しなやかなキューティクルが、キューティクルがあ!

リンクスくんは一瞬、私の腕の中で暴れようとしたけど、そうすると私が危ないと思ったのか動きを止めて、それから最小限の動作で腕の中からすると抜け出す。

あーあ、さらさらして気持ちよかったのに。

リンクスくんは頭を押さえて、顔を真っ赤にしながら私に言った。

「勝手に頭撫でるんじゃないよ、バカ主!」

おお、久しぶりに罵られた気がする。んー、でも許可があればいいのか。

「じゃあ、撫でていい?」

私は手をわきわきさせながらそう言った。

「やだ」

リンクスくんは逃げていく。残念。

そう思っていたら、私のスカートを誰かが掴んだ。意識をすぐ下に向けてると、ソフィアちゃんが頬を膨らませて私を見上げている。

「私の頭も撫でてください、エトワさま」

なにこの可愛い生き物。

「おーよしよしよ」

私はその頭を遠慮なく撫でる。うーん、リンクスくんに勝るとも劣らない撫で心地。シルウエストレの子たちはすごいなあ。頭もいいけど、髪質もいい。

「えへへ」

しばらく撫でていると、ミントくんが無言でソフィアちゃんの後ろに並んだ。

無表情な顔から視線だけで意思を伝えてくる。

えっと、ミントくんも撫でると? 順番待ち……?」

いや、うん、いいけどね。私もどちらかというとな撫でたいしね。

リンクスくんは来ないかなあと視線を移すと、シャーッと威嚇された。

そんな私たちを見て、パイシエン先輩がため息をつく。

「本当に仲がいいのね、あなたたち」

「あつ、すみません」

パイシエン先輩には、なんとなくいろいろとご迷惑をおかけした気分になる。

「別にいいけど、今日はそろそろやめなさい。アルセルさまとシーシエさまが来るわ」

「そうですね。ソフィア、ミント、護衛役の仕事とはそういうものではないはずだ。エトワさまもお控えください」

パイシエン先輩だけでなく、スリゼルくんからも注意された。「は〜い」

私は素直に返事をして席に戻る。

ソフィアちゃんとミントくん、リンクスくんもお澄まし顔で席に戻った。

「パイシエンさま、いらっしやいました！」

桜貴会のメンバーの子が外から走ってきて、賓客の来訪を教えてください。

「出迎えに行くわよ」

パイシエン先輩が席を立って、私たちもあとに続いた。

二階から降り、玄関の前で並んで、お客さまを待つ。

下で待機していた子が扉を開けると、向こうから二人の人物が歩いてくるのが見えた。

小太りでちよつと背の低い、でもさらさらの金色の髪をした育ちの良さそうな少年と、深い海の

ような青色の髪をした、気だるそうな雰囲気を持った大人っぽい少女。

前者は聞いていた通りの容姿だから、第三王子のアルセルさまで間違いないだろう。

青い髪の美人はきつとウンディーネ家のシーシエさまだ。ルーヴ・ロゼの中等部三年生ってこと

は、元の世界だと中学二年生ぐらいの歳。

でも、すでにその御身からは傾国の美女と表現できるようなオーラを放っている。

「やあ、わざわざ出迎えてもらってごめんね」

「懐かしいわねえ、小等部の桜貴会」

アルセルさまは人の良さそうな笑顔で私たちに挨拶し、シーシエさまは館を見上げて、妖艶さを感じさせる仕草で微笑んだ。それから、パイシエン先輩のほうを見て。

「パイシエンちゃん久しぶりね」

「はい、シーシエお姉さま。来てくださってありがとうございます」

パイシエン先輩とシーシエさまは親しげな様子だった。関係の深い水の派閥の貴族同士だしね。

シーシエさまは私にも目を留める。

こんな美人に見つめられると意味もなくどきどきしてしまう。ちよつと居たたまれない。

「それから今年は面白い子も入ったみたいね」

シーシエさまはくすりと笑って微笑んだ。

「あの、エトワは身分はいろいろと複雑ですし、性格も……ちよつと抜けたところがあって、頭も普段はとてアレなんですけど、でも私にとって尊敬できる部分をもっていて、だから桜貴会に入ってもらいました」

パイシエン先輩が、私が桜貴会に入った事情をシーシエさまに説明してくれる。

おお……パイシエン先輩、私のことをそんな風に思ってくれていたのか……

感動し………ていいの？ 感動していいんだよね、これ。でもなんかちよつと罵り言葉が多くなかった!? むしろ九割ぐらい罵られていたような。

頭がアレってどういうこと、ねえ。感動していいのこれ!!

「あら、別にいいのよ。桜貴会のメンバーの選定は皆が納得していれば自由だわ。むしろ私の時代

ももつと楽しくなるようなメンバーを選びたかったのに、アルセルさまが止めるんですもの」

「君は旅先で見かけた牛をメンバーに入れようとしたね。さすがに全員で止めたよ……」

残念そうにするシーシェさまに、アルセルさまがそのときの苦勞を思い出すようなため息をついた。

「そういうわけでこの子、中等部に持ち帰っていいかしら」

どうしてそういう結論に達したかわからないが、シーシェさまは私の体をひよいと抱き上げて、踵かかとを返そうとする。

「だめです！」

ソフィアちゃん、リンクスくん、パイシエン先輩が私の裾すそをがつしり掴つかんでそれを止めた。

おおお、良かった……。このまま献上品にされたらどうしようかと思っただぜ。

「子供たちのメンバー奪うのもやめてね……」

額を押さえたアルセルさまがため息をつきながらそう言った。苦勞してそうだ……

* * *

場所は移って、いざ中等部の先輩たちとお茶会。

アルセルさまが上座かみざに座り、パイシエン先輩がその横、私たちは適当に座る。

シーシェさまはどこから取り出してきたソファに寝そべり、小等部の子に淹ひれてもらったお茶

を優雅に楽しんでいた。

ふりーだむ。

王子殿下がいるのに大丈夫なんだろうか……。まあ当のアルセルさまが注意しないから大丈夫なんだろうけど。

そういうわけで用件を話すのも、身分が一番高いアルセルさまだった。

「実は君たちがシルウエストレの子たちと喧嘩けんかをしちゃったと聞いてね。事情を聞いて仲裁ちゅうさいできたらと思っただけだよ——」

そう語ると、アルセルさまは人の良さそうな顔にちよつと苦笑いを浮かべる。

「でも、僕たちが何かする前に自分たちで解決しちゃったらいいね」

「ご心配をおかけして申し訳ありません」

「ううん、仲直りできて良かったよ。まあだから用事はなくなっちゃったんだけど、どうせだから後輩の子たちとも顔合わせしておこうと思っただけだよ。来てみたんだ」

「どうやらパイシエン先輩とソフィアちゃんたちの騒動は、小等部だけでなく中等部のほうにも伝わっていたらしい。」

早めに仲直りできて良かったと思う。王子さまにまで、ご心配をおかけしたわけだしね。

王子さまを出張させたことに、さすがのソフィアちゃんたちも、ちよつと焦った顔をしていた。

うん、無理して誰かと仲良くしてほしいわけじゃないけど、自分たちの影響力の大きさは理解しておいたほうがいいかもしれないね。

それからアルセルさまは、ちよつと顔を曇らせてパイシエン先輩に言った。
「ルイシエンくんの件は残念だったね」

「いえ、あれはお兄さまが悪いです。当然の報い（むく）です」

慰め（なぐさ）の言葉をかけられたパイシエン先輩が、きっぱりとそう言った。

ルイシエン先輩は、パイシエン先輩のお兄さんで、私への嫌がらせのために使用した水の魔法が暴走を起こして、大事件に発展してしまったのだ。私の友達のポムチョム小学校の子たちも危ない目に遭つてる。その結果、ルイシエン先輩はよその学校に転校させられ、侯爵家を相続する権利も失つてしまった。

まあやったことがやったことだし、しょうがない。私もまだちよつと怒つてる。

「あの子は嫡子（ちやくし）として甘やかされて育つたものね。今回のことはいい薬になるんじゃないの〜？」

シーシエさまが容赦ない言葉をルイシエン先輩に投げた。

アルセルさまは苦笑いしつつも、その意見（ごし）に頷（うなず）く。

「そうだね。僕たちも子供のころからの付き合いだから、彼の悪いところもいつか直るだろうと甘く接していた気がするよ。もう少し、気にかけてあげるべきだったのかもね……」

確かに子供のころからの知り合ひって、ついつい甘く見ちゃうよね。

ちよつと悪ガキなところがあつたとして、そういうところも鬮（ひいき）目（め）でかわいく見えてしまう。

私だつてソフィアちゃんたちにそういう部分があつても、しょうがない子だなあとと思いながら見過ごしてしまうかもしれない。

「エトワちゃん、君には迷惑をかけてしまったね。ここにいないルイシエンくんに代わつて、僕からお詫（わづ）びさせてもらうよ」

「いえ、そんな！」

王子さまからお詫（わづ）びされて、私は慌（わづ）てて首を横に振つた。

ルイシエン先輩、いきなり転校させられちゃつたけど、こういう優しい人が見守つてくれるなら、きつと大丈夫かなと思つた。

* * *

アルセルさまたちがここに来た件も終わつて、しばらくお茶を飲みつつ雑談タイムになった。

「そういえば来月はエントランス・パーティーだけど準備はしてるかな？」

「あ、忘れてましたわ。どたばたして……」

「私も他のことで頭がいっぱいで……」

アルセルさまの言葉に、パイシエン先輩とソフィアちゃんがあつと気づいた様子で返事をする。
へー、パーティーか。二人とも大変だなあ。

パーティーとなると、ドレスとか、装飾品とか、女の子は準備が大変なんだよねえ。

きつと桜貴会（さくらきかい）のことで二人ともいっぱいだったのだろう。

焦る二人を他人事のように眺めてると、パイシエン先輩の視線がこちらを向いた。

「エトワ、他人事みたいなのにききな顔してるけど、あんたは準備はしてるの？ ドレスの仕立てとか、今から頼むならもうぎりぎりよ」

「いやいや、私はパーティーには無縁でして、今回も無関係ですよ」

嬉しいのか、悲しいのか。生まれてこの方、パーティーにはお呼ばれしたことがない。

そういう理由でのんきに構えていると、アルセルさまが戸惑った顔で言う。

「エントランス・パーティーはルーヴ・ロゼの新生を歓迎するパーティーだから、ルーヴ・ロゼの生徒は全員招待されてるよ……」

「えっ……」

まじっすか……。そんなこと聞いてないっすよ……

そう思ってたなら、ソフィアちゃんが涙目で私のほうを見ていた。

「ごめんなさいいいい、エトワさまに……。伝えるのも忘れてました……」

うおー、ソフィアちゃんの伝言ミスかー！

「大丈夫、気にしない！ 平気！ 平気！ なんとかなるよ！」

慌ててソフィアちゃんを励ます。

うん、桜貴会の件で大変だったもんね。忘れてても仕方ない仕方ない。

そもそも、私なんて適度に準備しとけばオッケーだし。なんなら普段着の中からドレスっぽいやつを……

「なんか適当にドレスっぽいものを着てけばいいやとか考えてそうね……」

ぎくりっ。パイシエン先輩鋭い。

「言っておくけどパーティーの当日は、国王陛下も来るのよ」

へえ、そりゃすごい……

私は着古した適当なドレスで王さまの前に立つ自分の姿を想像して、ちよつと青くなった。

* * *

お洒落は女の子に魔法をかけてくれるの。

今日は待ちに待ったパーティーの日。

この日のために仕立てた青いドレスを着て、薄く化粧してもらい、髪をアップにまとめる。子供の私にできる精一杯のお洒落をして、鏡を覗き込んでみる。

するとどうだろう。

はい、いつも通りの糸目の私がいまーす！

何もかわりませーん！

想像通りの結果に満足感みたいなのを覚えると、ささつと必要なものを持って部屋を出た。

「エトワさまー！」

すると向こうから、同じく準備を終えたソフィアちゃんが走ってきた。

銀色の髪に白いドレス。髪は私と同じアップにして赤いリボン。その姿を一言で表すと天使。

ああ、魔法がかかっている。魔法がちゃんとかかっているよ。

ただでさえ可愛い普段の姿から、さらに三割増しぐらいに乗せられたソフィアちゃんを見て、私はお洒落しゃれの魔法の存在を信じることにした。残念ながら私にはかからないけど！

「エトワさま、とつてもきれいです」

ウツトリするソフィアちゃんの目には何が見えてるんだろう。たまにこの子の目には私ではない何かが映っているのではないかと、ふと思う。そう考えると存在論的恐怖を不意に感じる。

「ソフィアちゃんもきれいだよ」

「えへへ」

お決まりの言葉だけど本心から返すと、ソフィアちゃんが嬉しそうに照れ笑いする。

むしろ本音を曝さらけ出すと、ソフィアちゃん「が」きれいだよ！

「それじゃあ行きましょう」

「うん」

パーティー会場はルーズ・ロゼの高等部の敷地にある大きな建物だ。

学校なのにパーティーが開けるような建物があるってすごいよね。さすが貴族って感じ。

パーティー会場へは、今いるルヴェンドの町にある公爵家の別宅から、公爵家所有の馬車で行くので、外で男の子たちと合流する。

男の子たちは子供用のスーツを着ていた。みんなフォーマルなネクタイをつけて、ミントくんだけ赤の蝶ネクタイ。誰の趣味だろう。かわいい。

みんな子供でもスタイルがいいのでよく似合っている。

スーツが演出するちよつとした大人っぽさが、背伸びした可愛さを引き立てていた。

「リンクスくんたちかっこいいよ。ミントくんはかわいい」

「エ、エトワさまもかわいいぞ……」

「どーもどーも」

こういうお世辞の応酬もいいよね。嘘でも褒めてもらえると気分がいいものです。「何で俺だけかわいい……？」

「それはかわいいからとしか言いようがないよ」

屋敷の前に馬車が停まる。

あれに乗っていざパーティー会場へ。

* * *

パーティー会場に着いた。

「ほら、手……」

降りるときリンクスくんが手を貸してくれる。

「ありがとう」

「別に大した手間じゃねーし……」

リンクスくんはこれがやりたかったのか、満足げな表情をしていた。なんともかわいい。エントランス・パーティーは子供たちの入学祝いパーティーということになってるけど、大人の貴族たちも多数参加するらしい。王族や高位貴族と知り合いになれる機会だからなんだとか。

現にここから見える人だからにも、大人がかなりの割合でいた。

生徒の親族ではない人たちまで、うまく招待状を手に入れてやってくるらしい。

「見て、シルウエストレ五侯家のご子息たちよ」

「まだ子供なのになんて綺麗な容姿をしてるんでしょう。大人になったら彼らと結婚したいご令嬢たちが殺到するわね」

「ソフィア嬢は国中の男性を虜にしてみよう」

貴族のご婦人たちが、ソフィアちゃんたちを見て口々に賞賛する。公爵家に最も近い家格と言われるシルウエストレの子たちは、国の貴族の中でも特別な存在だ。学校の生徒だけでなく、大人たちの間でもその人気は高い。

まあそんな視線はソフィアちゃんたちも私も慣れたもので、ソフィアちゃんたちは堂々と、私は空気のようすーとパーティー会場に入っていく。

会場に入ると、さっそくパイシエン先輩を見つけた。

「せんぱーい！」

手を振って駆け寄る。

パイシエン先輩は、髪と色を合わせたような水色の透明感のあるドレス。髪は流したままだけど、

編み込みでアクセントがつけてあって可愛かった。これは魔法がかかっている。

「パイシエン先輩、きれいですね〜」

私は本心からの感想を口にする。

パイシエン先輩は褒められ慣れてるのか、腕を組んでなんでもない風に返す。

「あんたもきれいよ、エトワ」

「ぶっぶっぶ、パイシエン先輩が私を褒めるって、社交辞令でもなんか面白いですね〜」

普段は毒舌の先輩がさらりとお世辞を言う姿がなんかツボに入った。口を押さえて笑っていると、パイシエン先輩の手が私の頬をぎりぎりつつねり上げる。

「私があんたを褒めたら何かおかしい？」

「ご、ごめんなひゃい……」

ほんとに痛い。私は速攻で謝った。

やめよう。社交辞令に対する意味のない指摘、からかい。

謝罪して頬をつねる指を離してもらって、痛いの痛いの飛んでいけと自分で自分の頬を撫でる。

ふと、背後に人の気配を感じて振り返ると、ふくれっ面のソフィアちゃんがいた。

「むう〜」

「ど、どうしたの……ソフィアちゃん？」

天使のご立腹に、私もパイシエン先輩も動揺した。

「エトワさまの頬、赤くなっています……」

ソフィアちゃんは私のそばに寄ると、責めるようにパイエン先輩を見た。

「いや、さっきのは私が悪いよ」

パイエン先輩をからかったのは私だし。

「そ、そうよ。エトワが変なことを言うから」

パイエン先輩も焦ってる。

なんでだろう。桜貴会に入るときもそうだったけど、パイエン先輩とソフィアちゃんは相性がちよつと悪い。二人が仲良くしてくれたら、小等部で断トツTOP2の美少女コンビ誕生で無敵の布陣なんだけじな。なぜかうまくいかない。

私がソフィアちゃんをなだめようとすると、ソフィアちゃんがぼそつと呟いた。

「エトワさまはパイエンさまの味方するんだ……ずるい……」

えっ……？ よ、よく聞こえなかったぞ……

明るいソフィアちゃんには、あんまり似つかわしくない言葉だった気がする。

ソフィアちゃんは、踵を返して走り去っていった。

私は慌てて追いかける。

ちよ、ま、待つてよ、ソフィアちゃんつて——足はやっ！

さすがは一緒に暮らしてきた三年間、病気一つしなかつた健康優良児。天使みたいな可憐な外見とは裏腹に、走る速さは野生の鹿のようだった。あつという間にその姿を見失う。

なぜか私はパーティー会場で一人だけ汗をだくだくかいて、息切れすることになった。

息を整えていると、会場に人がたくさん入ってきて、パーティーが始まってしまふ。

ソフィアちゃんを完全に見失って一人で戻ってみると、リンクスくん、ミントくん、スリゼルくん、クリュートくんの周りに人だかりができていた。同年代の女の子が多いけど、男女問わずいろんな年齢層の人がいる。

パイエン先輩の周りにもたくさんの人が集まっていた。

そしてソフィアちゃんの居場所もすぐに判明した。だつて周りにすごい人垣ができていたから。私はぼつーんと、パーティー会場で一人佇む。

今の私のそばにいてくれるのは、学校生活で休み時間や授業中に慣れ親しんだ、すでに私のフレンドと呼べるような一つの『概念』だけ。

こんにちは、『ぼっち』くん。今回もよろしく。

* * *

ぼっちになった私は、壁際の人のいない場所でローストビーフを食べていた。

立食形式のパーティー。テーブルにはたくさんの料理が並んでいるけれど、みんな話すのに夢中でほとんど手をつけてない。

本来、話しながら優雅につまむものなんだろうけど、会話が熱が入りすぎてるせいか、美味しそうな料理が手つかずのままテーブルの上で寂しそうに鎮座している。

誰も我が歩みを止めるものはおらぬ——そんなぼっちの最大の利点を生かした私は、テーブルからテーブルへと移動し、大皿にたくさん盛られたローストビーフを見つけた。

パーティーといったらローストビーフ。ローストビーフといったらパーティー。立食形式でのパーティーにおいて、お肉部門の代表選手を務めるような料理だ。

ステーキともグリルとも違う不思議な料理。

時には「ローストビーフにするぐらいなら、せっかくの素材をそのままステーキにしたほうが旨いんじゃないか」などと心無い陰口を囁かれる。けれど、そう貶す人たちもパーティー会場などでその姿を目にすれば、思わず一切れ、その不思議な焼き加減のお肉を口に運ばざるをえないのではないだろうか。そんな魔性の料理。

手つかずのローストビーフを、私はひよいひよいとお皿に盛る。ソースもたっぷりと。

壁際に移動して、まず一口。

うーん、美味しい。

絶妙な焼き加減のお肉に、工夫が凝らされたソースが合う。

さすがは貴族のパーティー。いい仕事してますなあ。

ああ、それにしてもぼっちになっってしまうとは情けない。

はむっ、ローストビーフうまし。

これからこういう場へ参加する機会が増えるのなら、もうちょっと立ち回りというものを覚えなければいけませんかもですな。

はむはむっ、ローストビーフうまし。

なんて会場の隅っこでやりながら、改めて侯爵家の子たちを見るとやっぱりすごい人気である。

リンクスくん、ミントくん、ソフィアちゃん、スリゼルくん、クリュートくん、それからパイシエン先輩。みんなの周りには、ひっきりなしに人が訪れている。

みんなの応対も完璧だ、さすがは名家の子供たち。よそゆきの顔は久しぶりに見た気がする。

あんなことがあったソフィアちゃんも、周りを取り囲む人たちに笑顔で応対している。

大人も子供もその天使の笑顔に夢中だ。

でも、なんだろう、その笑顔にちょっと曇りがある気がする。やっぱりさっきのことが尾を引いているのだろうか。

うーん、元気づけてあげたい。

「すみませーん、ウェイターさーん」

私は給仕の人に声をかけた。

「どうしましたか？」

ほっ、給仕の人は私にも普通の応対をしてくれた。ちょっと私の額にちらっと目がいったけど——

ルーヴ・ロゼの生徒が全員参加ってことは、平民の子たちもいるわけだし、ちゃんと全員をお客さん扱いしてくれるのだろう。面倒ごとを頼むつもり私としては、ありがたいやら、申し訳ないやら。

「紙とペンをお借りできないでしょうか」

「は、はあ。ちよつとお待ちください」

私の注文に戸惑いつつも、ウェイターさんは一旦下がって紙とペンを持ってきてくれる。

私はソフィアちゃんへのメッセージをしたためると、それをウェイターさんに託した。ウェイターさんはうまく人を避けて、ソフィアちゃんの好物の桃のジュースと一緒に手紙を届けてくれた。ソフィアちゃんはちよつと驚きつつも、手紙を開く。

それにはこう書いておいた。

『さつきはごめんね。私はソフィアちゃんのこと大好きだよ。今夜は一緒に寝ないかい』と。

ソフィアちゃんはメッセージを見て驚くと、きよろきよろと周囲を見回す。

私はちよつと行儀が悪いけど、パーティー会場に置いてあった椅子に膝ひざでのぼって、背を伸ばすと、ソフィアちゃんに手を振った。他の人にはほぼ存在を無視されているから、ふりーだむ。

目が合ったのは一瞬だけど、ソフィアちゃんの顔に明るい笑みが戻る。

元気を出してくれたようだ。

ほつとした私は、協力してくれたウェイターさんにお礼を言う。

「ありがとうございます」

「いえ、ご満足いただけただけでよかったです」

ウェイターさんは微笑み、頭を下げると、また給仕の仕事に戻っていった。

ありがたや〜。

* * *

心のつかえが取れた私は、会場の隅に戻ってローストビーフを食べる。
うまいうまし。

このままパーティーが終わるまでローストビーフと過すごすことになるかと思っていたら、そばに誰かがやってきた。

おお、桜貴会のメンバーの人じゃないですか。

見覚えのある上級生が二人、私のもとにやってくる。最上級生と思わしき背の高い女の子が、私の皿に盛りに盛られたローストビーフを見て、ちよつと気け圧おされた表情をした。

「な、なにそれ、ローストビーフがお皿に山みたいに……」

「えへ、めつたに食べられないものですか」

公爵家の別邸で暮らしているといても、毎日贅ぜい沢たくなごはんが食べられるわけじゃない。

もちろん美味おいしいんだけど、意外とメニューは普通だ。ローストビーフなんてなかなか食べられない。ここで食くいだめしておきたいのが庶民さかの性さがだね。

そう思いつつ、ローストビーフをフォークでまた一つ口に入れた。

「他の料理は食べないんですか？」

もう一人の女の子がたずねてくる。たぶん三年生ぐらいだと思う。

「他の料理も食べてあげたいのはやまやまです。誰にも手をつけられない可哀想な料理たち、彼らを救ってあげたい。でも、私の胃袋じゃこのローストビーフを食べきれないのが限界なんです」

「ごめんよ、たぶん美味いであろう他の料理たち。でも、君たちを救うには私の胃袋の容量が足りない。」

「な、なんで食べることに義務感を持つてるの……？」

「それってエトワさんがローストビーフ食べたいだけじゃないですか？」

「それもありません」

「お家ではなかなか食べられないしねー。あと二年は食べなくてもいいぐらいの勢いで食べておきたい。」

二人は私のそばに留まってくれる。どうやら話し相手になってくれるらしい。

「パイシエンさまから頼まれたの。こういうパーティーで侯爵家の人間は自由に動けないから、私たちの代わりに話し相手になってあげなさいって」

「あ、別にそれだけが理由じゃないですよ。これから桜貴会の仲間になるんですから、私たちも話しておきたかったですし」

パイシエンせんばうい。その優しさにちよつとじゅんとくる。

来てくれた二人も偽りない気持ちだと思ふ。だつてさつきから二人とも、周りの生徒たちにちらちらと見られている。彼女たちも桜貴会に入れる家柄の子なのだ。パイシエン先輩ほどでなくても人気者なのだと思う。なのに、わざわざ時間を割いて私のもとに来てくれたのだ。

「まだ自己紹介してなかったわね。私はレニーレ。アジオ伯爵家の娘よ」

「私はブルーナです。家名はモズですよ。レニーレさんと同じ伯爵家です」

二人が自己紹介してくれた。レニーレさんにブルーナさんね。忘れないようにしなければ。

レニーレさんは五年生。ブルーナさんは三年生らしい。

「エトワです。よろしくお願いします」

たぶん知ってるだろうけど、私も一応自己紹介をしておく。

それからしばらく、レニーレさんとブルーナさんは私と話してくれた。結構、打ち解けられたんじゃないかなって思ってる。

三十分ぐらい話して、二人は「それじゃあ、また別の子が来るから」と言つて去つていった。

私から離れた瞬間、様子を窺っていた生徒たちが寄つていく。やっぱり人気者じゃないか、私のために時間を取ってくれてありがとう。

次に来たのは、男の子の二人組だった。どっちもブルーナさんと近い年頃だと思う。

「お、俺はカサツグ。よ、よろしくなっ」

「僕はコリットです」

犬歯が光る、いたずらつ子そうな男の子がカサツグくん。優等生っぽい眼鏡の子がコリットくん。

二人とも自己紹介によると伯爵家の子供らしい。伯爵家は桜貴会のポリューム層で、ルーヴ・ロゼに数多くいる伯爵家の子たちの中でも特にふさわしいと認められた、選ばれた者だけが会に入れるんだとか。

この男の子たちは二年生だった。パイシエン先輩やブルーナさんの一つ下だ。なぜか最初気まずそうにしてたカサツグくんは、突然、手を合わせて私に謝った。

「ごめん！ 初めて会ったとき椅子を引いたのは俺なんだ。許してくれ〜！」

「ああ、いいよ〜いいよ〜」

そういえば、初めて桜貴会の館を訪れたとき、椅子を引く位をされたんだ。すっかり忘れてたけど。ずっとそのことが気まずかつたらしい。私は手を振って、ぜんぜん気にしてないことを伝えた。

私の言葉にカサツグくんは、ほっと胸を撫で下ろした。

安心したカサツグくんは、私の皿に積まれたローストビーフの山を見て羨ましそうな顔をする。

「ローストビーフかあ、美味しそうだなあ」

きつとカサツグくんたちも人気者だから、人に囲まれてなかなか料理を食べられないのだろう。

「食べる？」

「いいのか？」

私の差し出したローストビーフに、カサツグくんはぱくつと食いついた。

いい食べっぷりだ。相当、お腹がすいてたんだろう。

リンクスくんたちは大丈夫だろうか。ソフィアちゃんにもローストビーフを渡しておけばよかったかもしれない。ちよつと心配になる。

ひとまず私も、もう一口。

「コリットさんは食べますか？」

私はコリットくんにもフォークに刺したローストビーフを差し出す。コリットくんはちよつと赤面して首を横に振った。

「ぼ、僕はいいです……」

そっかー。

それから二人としばらく雑談して、お別れした。

次に来たのは男女の二人組。二人とも四年生らしい。

女の子のほうはお茶をよく淹れてくれる人だから名前を覚えていた。シャルティさんだっけ。男の子はエッセルさんというらしい。

二人とも十分ほど私と話してくれた。どちらも貴族らしいキリツとした人たちだった。

パーティーは全部で二時間半ぐらいだから、あと四十分ぐらいで終わる。

一人で過ごさなくていいのは本当にありがたい。パイシエン先輩と桜貴会のメンバーの人たちにお礼を言わなければならない。

別れ際にシャルティさんが言う。

「次はユウファイが来てくれるはずだからよろしくね」

桜貴会のメンバーは護衛役の子たちと私を除くと、パイシエン先輩を入れて八人だったから、最後の一人になったらしい。

私はまた会場の隅っこで、ぼけーつとしておくが、誰も来る気配はない。

まあみんなが好意的というのも不自然で、私と話したくない子もいるだろうなあ、となんとなく察することができた。

私は残り時間をローストビーフと過ごす。すると、後ろから声がかかった。

「ローストビーフは美味しいかね」

「はい、肉汁がちゃんと残っていて、ソースがよく合っていて、とっても美味しいです」

「ほっほっほ、そうかい。今日の料理はコックが腕によりをかけて作ると言っていたからね。その感想を聞いたらきつと喜ぶよ」

顔を少し後ろに向けると、白い髭の優しそうなおじいさんがいた。

まさか……この子がユウフィちゃん!?

* * *

ってそんなわけあるかい!

私は自分にセルフツツコミをする。

白い髭のおじいさんは会場で話すことに夢中な貴族たちを見て、少し寂しそうに言った。

「こういうパーティーでは多くの者が有力な者との繋がりを作ろうと腐心する。裏方としてパーティーを支える者たちが、彼らに楽しんでもらおうと腕によりをかけて料理を作り、懸命に音楽を奏でて、ほとんどの者はそれに気づかない……。我々は贅に慣れすぎたのかもしれない……」

そう呟いて、はつと表情を変え、優しい笑顔に戻って私に言った。

「すまん、年寄りの愚痴を聞かせてしまったのう。お嬢さんが美味しく食べてくれたら、そういう者たちが喜んでくれるという話じゃ」

「そうですか、よかったです」

糸目だから何も変わらないんだけど、笑顔を作っておじいさんの顔を見上げると、おじいさんが目を大きく見開いた。その視線は私の額の烙印に向けられている。

「そうか……君が……あの……」

その顔は痛ましいものを見るような、おじいさんのほうが辛そうな表情になる。

しわの刻まれた手が伸びてきて、私の顔を優しく撫でる。掠れた声で、おじいさんは呟いた。

「彼らは自分たちを追い詰めすぎる……」

悔やむような声で、なぜか私に謝罪をする。

「すまない、君がそうなってしまったのは、わしらのせいでもあるんじゃない……」

私はきよんとんとしてしまった。おじいさんの言葉の意味がわからない。こうなってしまったのは、私が魔力をもって生まれてこなかったせいで、おじいさんが悪いわけではないと思う。

私が首をかしげると、おじいさんは何かの紋章が彫られたペンダントを私の手に握らせて、こう囁いた。

「もし将来、何か困ったことがあったら、そのペンダントを城の者に見せて、ユーズルという人に会いたいと言いなさい。必ず助けになるよ」

ユーゼル。あれ？ どこかで聞いたことがあるような。そう思っていたら、文官らしき格好の人がおじいさんのもとに駆け寄ってきた。

「陛下！ 体調はもうよろしいのですか!？」

「ああ、だいぶよくなった。もう大丈夫じゃ」

その声で会場中の視線が一気におじいさんのほうに向く。

おじいさんの姿を見つけた貴族の人たちは、すぐにでも駆け寄りたそうな、けれど恐れ多くてそれでもできず、じつと機会を窺うような、そんな顔になった。

会場中の視線がこちらに集中している。

少なくとも私と二人でのんびり話してるような雰囲気ではなくなった。

呆然とする私を見て、おじいさんはちよつと残念そうに笑う。

「すまんのう、シルフィールのお嬢さん。またどこかで話そう」

「は、はい……!」

国王陛下と話してたのかー！ びっくりしたー本当にー!

陛下は私を貴族の視線から守るかのように、そちらへと歩み寄っていく。そこには瞬またく間にこのパーティーで一番大きな人だからできていった。

* * *

パーティーが終わると、ソフィアちゃんが私のもとに駆け寄ってきた。

「エトワさまー!」

もう機嫌は直ったみたいだ。よかった。

「エトワさま、陛下とお話ししましたよね。何を話してらしたんですか？」

おお、見てたのかい。ソフィアちゃんたちなら当然、陛下の顔も知ってるよね。なるほど。

「パーティーの料理が美味いねって話したよ」

額の印を見て謝罪されたのは秘密にしておいた。きつとソフィアちゃんは気にするだろうし。

「そうなんですか。そういえば私もお腹すきましたあ……」

ソフィアちゃんはお腹を押さえて眉尻を下げる。

ああ、やつぱりお腹減るよね。パーティー中は人に囲まれて、動き回れずに大変そうだったし。

私はドレスの袖からあるものを取り出す。

「はい、これでもお食べ」

もったいないからアルミホイルにローストビーフを包んでおいたのだ。ちよつと意地汚いけど、国王さまも言っていたように、作ってくれた人に恨まれるような行為ではないはずだ。

「わあ、いいんですか!? ありがとうございます!」

ソフィアちゃんはローストビーフを見て目を輝かせると、手づかみで口に入れた。貴族の子だけど、そういうところを気にしないのも、ソフィアちゃんの魅力だ。

「美味しい〜!」

きつとこの天使の笑顔を見たら、コックさんもこの料理を作ったことを誇りに思うだろう。ソフィアちゃんに満足するまでつまんでもらい、残りは他の子にあげようと思って袖に戻した。

ソフィアちゃんと二人で歩きながら、リンクスくんたちがいるであろう、馬車のある場所に向かう。

「そういえばソフィアちゃんは陛下とお知り合いなの？」

「はい、何度かお会いさせていただいたことがあります」

へえ、やっぱり侯爵家ともなるとすごいんだねえと感心する。私は初めてお会いしたよ。優しそうな人だったなあ。

そこまで考えて、ふと疑問が浮かぶ。

この世界の貴族はほとんどが強力な魔法の使い手だ。お父さまも見た目は線の細い美中年だけど、戦ったら強そうなオーラみたいなのを放っている。けど、あの優しそうな王さまが戦う姿は、なぜかまったく想像できなかった。

「国王陛下もすごい魔法の使い手なの？ とても優しそうな人だったけど」

この国に伝わる話では、貴族の最高位である四人の公爵は、同時に最高の魔法の使い手でもあるとされている。そして王家に仕える十三人の騎士、彼らもこの国では最高峰の魔法使いたちだ。

でも、王さまやその親族について魔法使いとしての評判は聞いたことがない。

そう、ないのだ。

魔法が重要視されるこの世界で、不思議とまったく。

私の疑問にソフィアちゃんが目を見開く。

それからちよつと困った表情をして周囲を窺った。これはあんまりよくない話題だったっぽい。

「そういえばエトワさまは、社交界に出たことがないから、そういう話には疎いんでしたね……」ソフィアちゃんは珍しくひそひそ声で言った。

「王家の方々は王位を血族の長子に継がせるとほぼ決めています。長子であれば魔法の素養がない方でも継ぐことができます。だからでしょうか、お力がどんどん薄れていく傾向にあるんです……」そうだったのか……

貴族たちの爵位の継承は知っての通り、その子の魔法の資質にかなり左右される。

私なんかはその極端な例だ。

他の貴族にはシルフィール家のような、魔力がない子に印をつけて追放する制度はないけど、第二子や第三子に傑出して魔力の強い子が生まれたら、跡継ぎに指名するなんて話は聞く。

ルイシエン先輩とパイシエン先輩の兄妹も、ルイシエン先輩のほうに魔力が高かったらしい。

パイシエン先輩も十分に跡を継げるぐらいの魔力があったから、継承権は移ってしまっただけ。

魔力、血筋、当主としての資質、醜聞、名声、いろんなバランスで貴族の後継者たちは選ばれる。

しかし、それは常にその家を継げるだけの最低限の魔力があることが前提とされている。

逆にシルフィール家以外でも魔力がない子は稀に生まれているはずだった。他の家では、それがなかなか表に出てこないのは……なんて怖い噂もあったりする。

「少なくともここまで王家が続く間に、五回ほど魔力の途絶があったと言われています。王族の

方々もなるべく魔力の高い女性を妃お妃に迎えて力を安定させようと試しやうみてゐるらしいのですが、あまりうまくは行ってません……。だから十三騎士という制度で、この国の安定を得ようとしています」

ソフィアちゃんの話では、今の国王陛下は子爵位の人と同じ程度の魔力らしい。

第一王子もそれと同じ程度。

第二王子は一番才能があり、伯爵位ぐらゐの素養があるという。

第三王子のアルセルさまは、ちょっと弱めで男爵位クラス。貴族としてはぎりぎりの魔力だそうだ。

あとお姫さまもいるんだけど、あんまり魔力はないんだとか。

ソフィアちゃんはいつもと違う、ちょっと大人びた表情をして言う。

「そんな王家の在り方に疑問を抱く者もいます。でも私は今の王家の方々を支持します。貴族が己おのが力を重視し、権益を確保するこの国で、王家の方までもが力をその地位の基準にしてみました。すべてが力に支配される国になってしまいます。力ではなくその資質によって国を治める。そんな王家があるからこそ、この国は安定していられます。それを守るために十三騎士だけじゃなく、私たち風の一族がいます」

それはたぶん、ソフィアちゃんのシルウエストレと呼ばれる側面なのだろうと思う。シルフィール公爵家を頂点として、『王家の盾』と呼ばれる六つの家の人間たち。

ソフィアちゃんはそのままで話して、はっとしたように私を見る。

「すみません、エトワさまにはご不快な話でしたよね……」

たぶんきつと、額の印のことを言ってるのだろう。

私はいいやと首を振る。

「ソフィアちゃんや、あのユーゼルさまが治めてくれる国なら、私も安心して暮らせるよ」

うんうん、平民になっても安心だ。

ソフィアちゃんはそれを聞くと、少し寂しそうな顔をした。

十五歳になったら、ソフィアちゃんと私は別の道を歩まなければならない。

「十五歳を過ぎても、ずっと友達でいてね？ いろいろ忙しいかもしれないけど、たまには遊ぼうね」

でも私の言葉でソフィアちゃんはすぐに笑顔を取り戻した。

「は、はい！ 私のほうこそ。絶対、絶対ですよ！」

第二章 生徒会選挙

エントランス・パーティーから一ヶ月ぐらいが経った。

桜貴会の人とも結構仲良くなれた感じの今日このごろだ。

そんなある日のお昼休み、桜貴会の館に行くと、パイシエン先輩がなんか書類をひたすら書いてた。

「なんですか？ それ」

私はずねると、パイシエン先輩が顔を上げる。

「生徒会長の立候補のための申請書よ」

「先輩が、せいかいちょー!？」

パイシエン先輩がすつと立ち上がり、私の頬をつまみ上げる。

「しえ、しえんばい……まだ何も言ってます……」

無実だ。変なこと言うつもりなんてなかったよ。本当だよ。

「普段の言動よ」

パイシエン先輩は私の頬を放すと、ちょっと疲れたように自分の肩を叩く。

「お兄さまがいなくなって、生徒会長の席が空席になっていたのよ。今は副会長が代理をしてくれ

ているけど、そろそろ次を決めないとって話になってね」

「でもパイシエン先輩って三年生ですよね」

普通、生徒会長って最上級生がやるものではないだろうか。

「私はニンフイーユ侯爵家の娘よ。現状、小等部では侯爵家が最上位の家格。その中で一番の年長者は私。だから私が生徒をまとめていけないといけないの」

なるほど。貴族の学校では年齢だけでなく、身分も考慮して生徒会長を決めるらしい。私の学年だとソフィアちゃんたちの誰かが生徒会長をやるのかもしれない。

身分社会の極致だと言えるかもしれないけど、パイシエン先輩を見ると、やるほうもやるほうで大変そうだ。

私も先輩を応援することにする。

「私も先輩に一票入れますよ！ あと、手伝えることがあるならなんでも言ってください！」
ぐつと力こぶを作ってみせる。べらべらの腕が、棒のまま折れ曲がったただけだけ。

「ありがと。でも別に心配することはないわ。どうせ立候補するのは私だけだもの。だから、この書類を仕上げれば、この件は終わりよ」

「なるほど」

貴族社会は空気の読み合いだ。

パイシエン先輩が出る以上、それより身分の低い子たちは立候補しないだろう。先輩は、水の派閥のナンバー2といわれる家の次期当主なのだ。わざわざ波風立てたいと思う貴族のほうに珍し

いのかも。

* * *

そして生徒会長選挙、立候補者の公示日。

掲示板には二つの名前が並んでいた。

パイシエン・ニンフィーユ。プラチナクラス三年。

クレノ・ルスタ。ゴールドクラス五年。

貼り出された紙を見て、生徒たちが騒ぎ出す。

「まさかパイシエンさまを相手に立候補する者がいるなんて……」

「クレノ・ルスタ、いったい誰なんだ？ 聞いたことがないぞ？」

「侯爵家の方が出るのに立候補するということは、それなりの身分の方？」

「私、知ってるわ。平民出身の男子生徒よ！」

「へ、平民が生徒会長に立候補!?」

そこにパイシエン先輩がやってくる。

高貴な者が纏うオーラとかがあるのか、その姿を見ると誰もが道を譲った。

掲示板の前にやってきたパイシエン先輩は、二つの名前が書かれた紙をじっと見つめる。そんな彼女を生徒たちが固唾を呑んで見守る。かく言う私もそこにまじっていた。

パイシエン先輩は紙を二十秒ほど眺めると、私に向かって言う。

「行くわよ。エトワ」

「は〜い、せんぱーい」

ここは逆らわないほうがよさそうだ……

空気を讀んだ私は、しずかくに、しずかくについていく。しずしず。

他の人たちはついてこなかった。顔に冷や汗を浮かべて見送っている。

人気のない場所まで来ると、急に先輩は俯いたまま笑い出した。くつくつく、とちよつと悪役じみた笑いだった。怖い……

顔を上げたパイシエン先輩の目は完全に据わっていた。

「ニンフィーユ家の娘である私に勝負を挑んでくるとは、いい度胸じゃない。生徒会長への立候補は自由だものね。こうじゃなきゃ面白くないわ」

やっぱりなんというか、こういうところはルイシエン先輩の妹なんだな〜って感じがする。いや、良い意味でね、良い意味でだよ。

ソフィアちゃんみたいに貴族なのに気さくなタイプの子も魅力があるけど、パイシエン先輩みたいに貴族の令嬢としてプライドもってやってるタイプもかっこいいと思うのだ。

パイシエン先輩の場合、なんだかんだ私みたいなのも困っていたら助けてくれるしね。たまに意地悪スイッチが入っちゃうこともあるけど〜。

「先輩、私も微力ながら応援しますし手伝いもしますよ〜」

立ち読みサンプル
はここまで

「そうね、私が勝つのは当然の話だけど、逆に言えば万に一つでも負けるわけにはいかないわ。投票日までの二週間、全力でいくわよ。エトワ、あんたの力も借りるわ」

「あいあいさー！」

そんなわけで、名門貴族のパイシエン先輩対、謎の刺客クレノ先輩の選挙戦が始まったのです。

* * *

次の日の昼休み、桜貴会のお茶会が終わったあと、私は部屋に残る。生徒会長選挙の作戦会議のためだ。

ちなみにソフィアちゃんたちは教室に戻っていた。残っているのは、私ともとのメンバーの人たちだけだ。

私も今日はボムチョム小学校に行かなきゃならないんだけど、パイシエン先輩に「足の速い馬車を用意している」と言われた。そんなわけで参加者である。

いわゆる選挙対策委員会。

全員が集合したところで、パイシエン先輩が確認するように言う。

「みんな、選挙で重要なことはわかってるわね」

「はい！ 名前と顔を覚えてもらって、たくさんの人に候補者の考えを伝えることです！」

私は自信満々に、パイシエン先輩の似顔絵を一生懸命に描いた手書きポスターを見せた。

